

## 摂食障害と〈身〉の医療—レインボーメディスンを例に—

茨木市保健医療センター所長 深尾篤嗣

【背景】摂食障害は、著明なやせという客観的身体レベルの問題およびボディイメージのゆがみという主観的身体レベルの問題をもつ代表的な心身症である。また、しばしば「関係性の病」と称されるように、間主観的身体レベルの問題が病態に大きく影響している。よってその診療にあたっては、成層的關係的存在である〈身〉に対する多次元的アプローチを要する。本症における〈身〉の医療の実例として、プロセスワークを心療内科診療に応用したレインボーメディスンが奏功した症例を呈示する。

【症例】40歳代女性。過喚起発作を主訴に X-2年8月当科受診。X年11月に演者が引き継ぎ、ラポールができるに従い患者は30年来の摂食障害(AN-BP)を告白。演者のサポートのもとアロマセラピストの資格を取得。抑うつ、不安症状もSNRI開始して改善したが、摂食障害は改善せずあらたに自傷行為が出現。インナーワークにより、幼少時に父から虐待され甘えが満たされなかったためにできた心の空洞を過食で埋めようとしていたことの気づきが得られた。幼少時から繰り返し見ていた「何かに追いかける夢」をワークしたところ、患者は「甘えをコントロールできない自分」という一次プロセスとともに、「困難に出遭うと強さを発揮する自分」という二次プロセスが存在することに気づいた。以後、演者は外来面接の場で適度な依存体験を通じて全体性の回復を促すようにした。X+4年8月、患者は自主的に父のアルコール依存症の治療に付き添いアロママッサージを施す体験の中で、父もまた甘えを求めていたことの気づきを得た。X+6年4月、患者が家族に摂食障害について告白、受容されたこと、および同年11月山岡昌之医師の講演に参加したことを契機に過食、自傷行為ともに消失。現在ではユングのいうウンデット・ヒーラーとしてクライアント達を癒す日々を送っている。

【結論】〈身〉の医療は、摂食障害患者の症状を癒し、自己実現を促すことが示唆された。